

全カリの20年とこれからの思いを馳せて

林 英明

はじめに

全学共通カリキュラム（以下、「全カリ」）運営センターは1994年に発足し、1997年からカリキュラムの運用を開始した。筆者は2010年度から全カリ事務室に勤務しているため、全カリ20年の歴史を振り返ることはできないが、実は1997年に本学に入学した全カリ一期生という浅からぬ縁がある。学生当時は想像することはできなかったが、大学設置基準の大綱化から一般教育部の解体を経て、全カリをスタートさせた、当時の教職員の並々ならぬ努力と信念にあらためて敬意を表したい。

全カリ発足からこれまでの振り返りについては、本書に掲載されている初代全カリ運営センター部長である寺崎昌男先生のインタビューに詳しく収録されているため、筆者はこれからの全カリに期待されることについて、以下に考えを述べたい。

4年間を通じた体系的なカリキュラムの策定

1991年に大学設置基準が大綱化された目的は、一般教育課程と専門教育課程といった硬直的なカリキュラム制度を弾力化し、柔軟なカリキュラム設計を可能とするためである。多くの大学では大綱化以降、専門教育重視のカリキュラムへと傾倒する中、本学では「専門性に立つ教養人の育成」という

理念のもと、一貫してリベラル・アーツ教育を重視してきた。現在本学は約2万人の学部学生を抱える規模となったが、こうした規模で全学共通のカリキュラムを維持・発展させている大学はめずらしく、全カリは本学における重要な教育資産といえるであろう。

一方で、学生の側からカリキュラムを見ると、全カリと専門教育に二分化している印象を持たれていることは否めない。2012年の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、我が国の大学生の学修時間が諸外国の学生と比べて著しく短いなどの理由から、学士課程教育の質的転換によって、学生を能動的学修者へと育成することが必要であると示されている。そして、この学士課程教育の質的転換の方策として、体系的・組織的な教育の実施が提案されているのである。

本学では、学士課程教育における全カリと専門教育といった二分化を解消し、より体系的な教育プログラムを実施するため、2016年度以降に実施する「学士課程統合カリキュラム」（以下、「統合カリ」）を検討している。統合カリでは、学士課程を導入期、形成期、完成期の3つの区分にわけ、全カリと専門教育の接続がよりシームレスになるようカリキュラムの設計を行っている。

さらに、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」に採択された

ことに伴い、2016年度から新たに「グローバル教養副専攻」の実施を策定している。このグローバル教養副専攻では、グローバル化が加速する社会に対応するために、ひとつの専門性による知識のみではなく、各分野を横断する知識の修得を涵養することをコンセプトとしている。これに加えて、目的を持った能動的な科目履修や、海外体験を促す仕組みづくりを検討しているところである。

グローバル化する社会における多様性の重視

先ほどグローバル化について触れたが、吉田(2006)によるとグローバリゼーションとは、財、資本、サービス、人、情報などが国境を越えて移動することによる社会システムの再編成過程と包括的に定義される。さらに、グローバリゼーションを主導するのは経済市場の力であり、教育においてもeラーニングの発達などにより、英語圏の教育システムが発展途上国に一方的に輸出され、教育内容が汎用化・単一化されていくという見方もある。

グローバル化する社会においては、国境を越えた人々の移動もますます活発化していくはずであり、国際的なコミュニケーションツールとして、今後も英語の重要性が増していくことは言うまでもない。一方で、多様な文化的背景をもった人々と交流するためには、「多文化理解」も極めて重要な素養となってくるであろう。現在の全カリ運営センター部長である佐々木(2014)は、新しい教養の概念について「ひとつの専門的支柱を持ちながらも、他の専門性と交流し、連携することができる柔軟な思考力と多様な知的触手である」としている。さらに、教養の基盤である言語についても、現状

では英語が圧倒的流通力を持つが、文明事象の複雑さには英語だけでは処理できない内容も含まれているため、他の言語に向けた触手を持っていないといけないとしている。

本学では、全カリの言語教育において英語+1言語(ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ロシア語(文学部のみ)・日本語(留学生のみ)の中から選択)を必修科目として設定している。この+1言語を学ぶことを通じて、英語圏の文化のみを自国とは異なる文化として見るのではなく、世界には多様な文化圏が存在することを意識できるようになるのである。こうした多言語を通じた多文化理解の教育プログラムは今後さらに発展させていくべきであろう。具体的には、前述のグローバル教養副専攻と言語教育を有機的に結びつけ、言語教育の必修科目を修了した学生が、多言語や多文化について継続的な学修意欲を持つように涵養する方策が考えられる。

新しいカリキュラムの検証

2016年度の実施に向けた統合カリやグローバル教養副専攻について既述したが、現在はこうした新しいカリキュラムの立ち上げに向けて、鋭意議論を重ねている。

これまでも全カリは1997年の立ち上げ以降、数年に一度のペースで大小さまざまなカリキュラム改革を行ってきた。カリキュラムの検証にあたっては、学生による授業評価アンケートなどにより、カリキュラムに対する学生の反応を調査している。しかしながら、調査結果は報告書にはまとめられるものの、調査データをさらに深掘りした分析を行う機会は少ない。今後は、カリキュラムや学士課程の目標

に対し、アンケートや成績データを用いて学生がどこまで目標に近づけているのか学修成果に関する調査・分析を行い、こうした検証にもとづき次の新しいカリキュラムを策定していくという、いわゆるPDCAサイクルを循環させていくことが必要となるであろう。

本学では、学士課程全体の学修成果分析については大学教育開発・支援センターの教学IR部会が実施しているが、部局単位のカリキュラムや科目などの詳細な分析は、当該部局でも担えることが望ましい。このためには、統計リテラシーを備えた分析の担い手の育成方法や分析手法、データ取得の効率化などについて大学全体で議論していく必要があるだろう。

おわりに

本稿では、これからの全カリに期待される役割について、カリキュラムの

体系化、グローバル化、多言語学修を通じた多文化理解、カリキュラム検証の重要性などについて論じた。グローバル化による大学に対する社会からの要請の多様化・複雑化や、少子化にともなう学生の質の変化など、大学を取り巻く環境はこれからも大きく変様していくことが予想される。学士課程教育における全カリは、時代とともに組織もカリキュラムも変化が求められるであろう。しかしながら、全カリ発足から一貫してきた「専門性に立つ教養人の育成」という教育目標は変わることなく継承し、学生の成長へとつながる教育を追及していくことが私たち職員に与えられた使命であると感じている。

はやし ひであき

(本学職員／
教務部全学共通カリキュラム事務室)

【引用・参考文献】

吉田文 2006 「グローバル化するeラーニングー市場原理と国家の交錯ー」 『教育学研究』 第73巻 第2号 pp.29-40

佐々木一也 2014 「立教大学全学共通カリキュラムにおける教養教育の未来（教養教育の再考）」 『IDE：現代の高等教育2014年11月号』 Vol.565 pp.49-53